

語りあいのなかの〈故郷〉

—都市の同郷会に集う老年期女性たち—

石井 宏典

要旨

沖縄島北部の一集落を出身とする老年期女性によって結ばれた2つの同郷会をとりあげ、集いの場における語りあいに着目した参与観察を行った。双方とも月一度の会合に年に数回の頻度で参加し、2010年からの9年間にそれぞれ18回と14回の観察を重ねた。記録された語りあいは、「現在とこれから」にかかわることと「過去」の出来事の振り返りに大別できた。前者は、老いという喪失の過程を互いに支えあうような語りあいの特徴としていた。後者は、子どものころの〈故郷〉を懐かしむような語りあいが目立ち、身近な人やなじみの場所に包まれた温もりを伝えていた。こうした故郷回帰の心性は、老いの道程を歩んでいることと結びついていることが推察された。彼女たちは月に一度、自らの芯が形成された〈故郷〉への思慕を寄せあえる有り難さをかみしめていた。

1. フィールドと研究課題

1. ホタル会の集い

沖縄県宜野湾市の国道58号沿いにある割烹店で、毎月第二土曜日の昼どきに開かれる模^も合^あがある。模合とは、相互扶助的な金融の仕組みとして活用されてきた頼^{たの}母^も子^し講^{こう}のことで、現在の沖縄では親睦を目的に、居住地域、同級生や同郷人など、何らかの共同性に支えられた人々たちによって盛んに結ばれている。「ホタル会」と名付けられたこの模合に集うのは1937年生まれの女性たち十数人で、沖縄島北部本部半島の先端に位置する備瀬集落の出身者たちである。同郷の同級生が集うこの模合のひとつを紹介することから始めたい。

〈場面1：ブーサーヘイ〉[2014-11-08：ホタル会⑧]¹

みんなが食事を終えて一息ついていると、照子さんが肝心の模合金を集めるのを忘れていたと声をあげ、それぞれが彼女に会費の1万円を手渡した。毎回、集められたお金は半分ずつに分けられて希望する2人が順番に受けとることになるのだが、このとき手を上げたのは1人だった。和子さんは、3、4月の卒業・入学シーズンに取りたいと話していた。

その後も、誰も受けとりたいと言ひ出さないで、照子さんが「ブーサーヘイで負けた人が取ることにしよう」と言ひ出した。ブーサーヘイは、かつて備瀬で行われていたじゃんけんで、「ブー、サー、ヘイツ」のかけ声とともに、各自が親指、人差し指、小指のいずれかを突き出して勝負する。親指は人差し指に勝ち、人差し指は小指に勝ち、小指は親指に勝つ。どれにどれが勝つのか負けるのか忘れてしまったという声も聞こえてきたが、いいよ、どれか出せば、と返されていた。互いに笑いあうなか、みんなで声を合わせて「ブー、サー、ヘイツ」と、指を突き出した。1回目で3人が負け、その3人で勝負した2回目で1人が負けたので、もらい手が決まった。みんな嬉しそうに「久しぶりにブーサーした」、「いま、思い出したさ」などと言ひ合いながら、余韻を味わっていた。「どうして小指が親指に負けるの?」とチエ子さんが投げかけると、「父親も子どもには勝てないということじゃない」と隣のケイ子さんが応え、「人差し指はお兄さんと聞いた」と付け加えた。子どものころによくやったというブーサーヘイに興じる彼女たちはじつに楽しそうに、かつての感覚を味わっていた。からだを使った遊びをとおして、身も心も子ども時代にかえっていた。本稿では、老年期にある女性たちが集う2つの同郷会に密着し、そこでどのような営みが展開されているのかを探ってみたい。

2. 研究の課題と視点

戦後の復興期において、大阪や那覇などの都市に働きに出た備瀬の人たちは集落単位と同郷会を形成した。大阪では西成や堺を中心に関西地区備瀬同志会²、那覇では那覇在住備瀬郷友会、普天間では普天間備瀬郷友会が結ばれた。那覇の場合、新天地市場と呼ばれる衣料品卸市場の形成過程に多くの備瀬出身女性たちが加わった。この市場の歩みを跡づけるため、市場での参与観察と商い経験者へのインタビューを重ねた³。その過程で、老年期を迎えつつあった彼女たちが同郷・同年代の集いを編んでいることがわかった。こうした同郷会は、上記の郷友会のように世代をまたいで組織化されたものではなく、月に一度の親睦模合を楽しむ同年代の小さな集まりだった。

かつて、青壮年期の同郷人たちによる結びつきは、移動先での生活の安定といった「将来を志向した現在」を支えるための営みを中心だった。その結合は、母村から都市に移行するさいの足場を与え、文化間の移動に伴う衝撃をやわらげる緩衝空間となり、さらには生活の糧となる職業的社會化の現場を提供してきた。一方、本稿でとりあげる同郷会では、定住化の過程を経て老年期に至った人たちが集い、「老いの過程にある現在」を支えあうような営みを中心となっていることが予想される。

先行研究によれば、同郷会は当初、住居や職の確保のための相互扶助といった道具的機能を中心に担ってきたが、移動先での生活が長期化かつ安定化するにともない、しだいに表出(情緒)的機能に重心を移していった(加茂, 1995⁴; 石井, 1993⁵, 2000⁶など)。成員たちは会の活動への参加をとおして、出目的アイデンティティを確認する。すなわち、同郷人による

結合は本来、道具的および表出的といった二重の機能を担うが、移住初期から定着期にかけては道具的機能をより発揮し、その後の安定期から引退期にかけては表出的機能が前景化する⁷。こうした基本的構図は明らかにされたが、老年期にある人たちの情緒的交流についてその具体的様相を把握する作業が残されている。本稿の課題はここにある。

本研究はまた、人と場所との関係に焦点をあてる。人の経験は、場所と切り離して理解することはできない。レルフ(1975)は、場所の経験を内側性と外側性という二分法をもとに分類し、人が場所に埋め込まれ一体となった状態を実存的内側性と呼んだ⁸。ロールズ(1980)は、特定地域への参与観察にもとづき、内側性の感覚は、身体的(居慣れた環境)、社会的(仲間とのつながり)、自伝的(思い出の刻印)という3側面に支えられていることを指摘した⁹。本稿で注目する同郷会での語りあいには、ふるさとの固有の場所に埋め込まれたかつての営みがしばしばとりあげられる。このとき語り手たちは、家庭やムラ共用の広場、さらにはムラ全体に包まれていたという内側性の感覚を確かめあっているようにみえる。

本研究の目的は、ある集落を出身とする老年期女性が集う2つの同郷会をとりあげ、その会合への参与観察を重ねることによって、成員どうしの情緒的交流の具体的様相を把握し、そうした交わりが参加者たちに何をもたらしているのかを考察することにある。

II. 同郷の集いと語りあい—対象と方法

1. 福女会

那覇で1954年に結成された備瀬郷友会は、1970年に婦人部(現在は女性部)を編成している。この婦人部の中心は、新天地市場で商いをする女性たちだった。1980年ごろ、当時60代を迎えた婦人部のメンバーが小さな親睦模合の場を結んだ。会の名前は、ふるさとの象徴でもある福木並木にあやかって「福女会」とした。この会の発起人のひとりでもあり命名者ともなった上地ミエ子さん(1920年生まれ、故人)は、この名前に込めた思いを振り返り、こう記している。「暑い夏の日には涼しい風を呼び、寒い冬の日には備瀬の北風から守り、どんな台風にも揺らぐことなく大地に根を張り、空に向かって伸びる逞しさの福木、その姿に祈りを込めて私は福女会と会名を名付けました(一部、句読点など追加)」¹⁰。

ミエ子さんに誘われて、この福女会の集いに初めて参加したのは1995年9月の晩のことだった。市場を引退したある女性が所有する古い瓦屋で、備瀬の女性たちが彼女の手料理に舌鼓を打ちながらおしゃべりを楽しんでいた。みな我先に話したくて仕方がないという思いを寄せあった、なんとも賑やかな場の雰囲気が印象に残っている。当時23名のメンバーのほとんどが、新天地市場での商いかその製品を仕立てる縫い子の経験がある60~70代の女性たちだった。彼女たちはまた、1980年代後半から1990年代にかけて、ふるさとのシニグ行事に駆けつけ、アサギ(お宮)前で結ばれる踊りの輪に加わってきた¹¹。

その後、高齢化が進むなかで少しずつ会員が入れ替わりながらも、月に一度の集いは途切れることなく続いてきた。個人宅だった会場はやがて、交通の便のよい那覇中心部にある古いホテルのレストランに移った。集まる日も毎月20日に固定され、時間帯も夜から昼どきに変わった。2018年現在の会員は18名で、年齢は70代後半から91歳にまたがっており、夫（または亡夫）も同郷である人が多い。新天地市場で働いたことのない人も増えてきたが、戦前戦中から終戦直後にかけて備瀬で幼少期を送った人たちであることは変わらない。現在、シニグ行事に参加するのは70代の「若手」メンバーに限られるようになった。

会場となるレストランは20ほどのテーブルが並ぶ広さがあって、壁際に並ぶ3つのテーブル席が会の定位置である。座る場所が決められているわけではないが、同級生か年齢に近い者どうしが近くに座る。入口からもっと遠いテーブルには70代の「若手」が集まり、手前の2つには80代の古参メンバーが座る。私は後者に席を定めることが多かった。参与観察を始めて8回目の集いの様子をフィールド日記から紹介する。

2014年7月20日 福女会

11時半、山の内ホテルの入口に立つ。誰かが来るのを少しだけ待ってみたが、思い切って3階のレストランに上がる。案内板にはこの日、福女会を含めて模合とみられる会の名前が5つ書かれていた。いつものテーブルをのぞくと、すでに3人来ていた。その後、つぎつぎとメンバーが現れ、集合時間の12時には15人が集まった。一番手前のテーブルに座る信子さんの隣に場所を定める。彼女は、足が痛くて2週間ほど入院していたことを周囲に伝えていた。先日行われたふるさと備瀬と3つの郷友会（那覇、中部、名護）合同のグランドゴルフ大会の話題が行き交う。それぞれが食事の注文を終えると、カツ子さんが紅びんがた型風の生地びんがたで小さな貝を包んだ手づくりのお守りを配って廻った。ぼくにもいくつか手渡してくれる。そして、運ばれてきた食事をおしゃべりしながら頂く。

13時すぎ、模合金を集め終えると、ふたたびあちこちで語りあいの輪ができる。ぼくも近くに座る人たちの会話に加えてもらう。トーカチ（数えの八十八歳）のお祝いが近いという話題から、文子さんが、戦前にトーカチをした実家の曾祖母のことを語ると、孝子さんもそれに応えての語りあいが展開した。それがひと段落すると、文子さんがテル子さんに「姉さん、歌でもやろうか」と投げかけ、テル子さんが「浦島太郎」の歌をうたい出し、キヨさんも一緒に声を合わせた。謝花小学校からシマ（集落）まで1里、肩を組んで歌いながら帰ってきたからよく覚えているのだという。「あのころに戻りたいね」と文子さんがもらしたので、「もう戻っていますよ」と声をかけた。そのご話題は、学校からの帰り道にムラが見える名護原の高台まで来るときまってお腹が空いたこと、朝の登校時に肥やしや桶や鍬などを畑まで持たされたことなどが続いた。

15時前になって多くの人たちが腰を上げるなか、文子さん、孝子さんと妹のカツ子さんが残って思い出語りを続けた。カツ子さんが、パマガー（井戸の名前、満潮時には海面

表1 参与観察の実施状況、参加人数、年齢

福女会	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
参加月のべ回数	10月 ①	8月 11月 ② ③	1月 8月 ④ ⑤		4月 6月 7月 ⑥ ⑦ ⑧	2月 3月 4月 ⑨ ⑩ ⑪	2月 3月 6月 ⑫ ⑬ ⑭	2月 5月 ⑮ ⑯	2月 7月 ⑰ ⑱
参加人数	16	18 18	15 18		18 20 19	19 18 17	16 14 20	16 17	12 15
年齢	80歳	81	82	83	84	85	86	87	88
入退会		入会2			入会2	退会1	入会1、退会4	退会1	退会2
ホテル会	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018
参加月のべ回数		2月 ①	3月 8月 9月 ② ③ ④	8月 ⑤	3月 9月 11月 12月 ⑥ ⑦ ⑧ ⑨	4月 ⑩	5月 ⑪	6月 8月 ⑫ ⑬	3月 ⑭
参加人数		12	14 10 13	10	15 12 16 11	12	10	11 10	7
年齢		74歳	75	76	77	78	79	80	81
シニグ参加	6	7	6	5	5	6	6	3	2

福女会の年齢については、とくに注目していた人たち（1930年生まれ）の年齢

下に沈む)の湧水を海に潜って飲んだという体験談を披露したい、「プクプクプクプク」と水の湧く音をまねながら、まさに潜って飲むような姿勢になっていた。15時半、お開きにしようと席を立った。

福女会での参与観察は、2010年2月を初回として年に2、3回の頻度で行い、2018年7月までに18回実施した。この間、新しく入会した者は5名で、全員が70代の女性だった。一方、退会者はあわせて8名で、うち6名が80代後半の人たちだった（表1, 写真1）。

2. ホテル会

冒頭にも紹介したとおり、メンバーは1937年生まれの備瀬の同級生どうしという特徴がある。この会の結成は1990年ごろで、子育てがひと区切りした50代半ばに互いに声をかけあって集まるようになった。2018年現在の会員は13名だが、飛び入りの参加も時々みられる。日常的にもこまめに連絡を取り合う間柄の人が少なくない。

彼女たちは、小学2年に上がるころ沖縄戦を迎えている。戦後の中学校時代には転出者が相次ぎ、入学時に約60名いた備瀬の同級生が、卒業まで残ったのはその半分ほどだった。会のメンバーで高校に進学したのは1人で、他は中学卒業後に中南部や大阪に働きに出た。大阪に渡った4人はいずれも同郷人が経営するメッキ工場で働いた。

「ホテル会」という名のとおり当初は夜に集まり、月に一度の模合では当時流行っていたダンスやカラオケなどを楽しんだという。また、毎月積み立てもして、年に一度の旅行を楽しんできた。80歳を過ぎた現在は模合のみ継続し、年に一度、5月の母の日前後の会合時に那覇市内のホテルに泊まり込んでの語りあいを楽しんでいる。また、2000年代に入ってからふるさとの伝統行事シニグを加勢するようになり、現在まで継続している。



写真1 福女会 (2011年12月)



写真2 ホタル会 (2014年3月)

ホタル会の集いに私が初めて参加したのは2011年2月で、会員が74歳のときだった。会のまとめ役を担う仲宗根照子さんとは中部郷友会（普天間郷友会を改称）の会長の仲立ちで会うことができ、その後シニグ行事の場で再会していた。彼女の手引きで会に初めて顔を出したとき、シニグに参加していた人が7名もいたため、そのときの話題を通じて受け入れてもらえた。フィールド日記には、場の盛り上がりで圧倒されつつもなじみやすい場所だった、と記している。参与観察を始めて8回目の集いの様子を日記から紹介する。

2014年9月13日 ホタル会

那覇市内からバスで宜野湾市大謝名に向かい、割烹「田舎」には11時半に到着した。まだ誰も来ていなかったが、いつもの奥の座敷で待つことにする。12時になるころ、松枝さんが一番乗りで、続いて照子さんも顔を見せた。久しぶりのシゲ子さんは家で採れたニラを入れた袋を下げて来た。12時15分、一気に増えて10名となった。しばらくは、各自注文したお昼を食べながらのおしゃべりが続いた。

昼食がひと段落するころ、照子さんが、11月に大阪に引き揚げるチエ子さんの送別会をどうするかと声を掛ける。話し合いの結果、那覇のホテルで10月第3土曜に一泊しようということにまとまる。予約は和子さんが担当することになった。今のところ、全員が参加の意思を示した。その後、シゲ子さんが持参したニラ、ゴーヤ、シークワサーをみんなで分ける。注文した月見そばをシゲ子さんがほとんど手をつけていないのを和子さんが見つけて、「シーコ、少し食べないと」と声を掛ける。食欲があまりないというシゲ子さんが「朝晩、こんなに食べるの?」とみんなに投げかけると、一同、「食べる」と口を揃えた。「一食抜くと手が震える」と照子さんが笑った。14時15分、いつもより早めにサヨさんたちが立ち上がった。介護中の夫が肺炎を起こし入院しているので、お見舞いに来る人たちを案内するという。シゲ子さんも腰を上げたのをきっかけにお開きとなった。

それから照子さんの「コーヒーを飲もう」という掛け声で、近くのファストフード店で二次会となる。ケイ子さん、和子さん、末子さんに照子さんとぼくの5人。コーヒーを飲

みながらのおしゃべりを続ける。人数が絞られたこともあって、こちらでは思い出話がより具体的に展開し、話題が尽きることはなかった。あの貧しいなかを生きてきたから人の痛みがわかるしこうして話もできる、よかったねと頷きあう姿に、これまでの人生の重みを感じる。子どものころ、親や祖父母がスーコーヤー（法事の家）から持ち帰る餅や豆腐を楽しみにしていたというエピソードがこのときも出ていた。語らいは18時すぎまで続き、「あー、よく笑った」という照子さんの一言が、その場の雰囲気をも物語っていた。

この日のように、ホテル会にはたいてい二次会がある。一次会は参加者が多くどちらかと言えば近況報告などが中心となるのに対して、少人数になる二次会では、しみじみとした語りあいが展開することがよくあった。ホテル会での参与観察は、2011年2月を初回とし年に1〜4回の頻度で通い、2018年3月までに14回実施した（表1, 写真2）。

3. 語りあいの分類—現在と過去

2つの同郷会への参与観察は、一定期間に集中して実施したのではなく、間隔の空いた参加を長期間にわたり重ねるといったスタイルとなった。そのため、ある時期の特徴を把握するのは困難だったが、他方で、9年といった時間経過に伴う老いの過程を垣間見ることができた。この点は、本研究の特徴ともいえるだろう。

集いの場の記録は、フィールドノートへのメモ書き、ビデオカメラでの撮影、ICレコーダによる録音という手段を併用した。最初に記録することの了承を得て、状況に応じてこれら3種の媒体を使い分けた。ただし、ビデオカメラを三脚に固定させて会合を通して録画するといった形式とはらず、場の展開をみながら適宜撮影した。ビデオカメラを用いた記録スタイルについては、参加者たちもじきに慣れて気に掛けなくなった。ICレコーダによる録音についても適宜行い、会合を通しての記録も何度か試みた。

語りあいは、全員がひとつの話題に加わって盛り上がる場面と、近くに座った者どうしがそれぞれの話題を展開させるといった場面があり、後者のほうが多くの時間を占めていた。そのためすべての会話を把握することは不可能で、私も近くに座る人たちの会話に入れてもらいながら記録した。福女会の場合、20名ほどの参加者が3つのテーブルに別れて座るため、全員がひとつの話題に収斂するというのではなく、特定の古参メンバーが集まるテーブルでの展開に注目するという姿勢で臨んだ。

観察記録の整理にあたっては、ひとつの話題として区切ることができるものを一単位として、その単位ごとに見出しを付けた。ただし、ある話題が呼び水となって、つぎつぎと関連する話題が連なっていくような話題の連環にも注意を向ける必要がある。話題としてとりあげられる出来事は「人、物、活動、時、場所、意味（行為者によるその時点の意味づけ）」などの要素から構成され、さらにその出来事全体を包む「雰囲気」や語り手による現時点での「意味づけ」を掬うことができる。本研究では、出来事がまとう雰囲気にも着目する。

表2 語りあいの分類

現在とこれから		過去
近況、身の出来事	青年・中年期	子どものころの出来事
体調、病気・けが	離郷、仕事	家族（両親、祖父母、きょうだい、親戚）
家族（夫、子、孫）	結婚	食体験（時季、作物、海の恵み、折目、わかちあい）
同郷人の話題（弔事・慶事など）	子育て	家事（子守、水汲み、畑仕事、山への薪取り、貝採りなど）
老いの過程、喪失体験	親のこと	ムラの行事・習慣・人物
ふるさと・郷友会の行事参加	交友・趣味	遊び、歌（童歌・唱歌・軍歌）
交友・趣味		学校（運動会、方言札、登下校など）
将来展望（近い・遠い）		戦争体験

そして、とりあげられた話題は、「現在（最近）とこれから」のものと、現時点から振り返った「過去」のことに大別できた。「過去」についての話題はさらに「子どものころ」と「青年期・中年期」に分けられ、とくに前者が多く語られる傾向にあった。話題の分類についての詳細は表2に示す。ふるさとでの子どものころの話題が多く集められたのは、調査者の研究関心が反映した面も無視はできないが、老年期の人たちが集う同郷会が子ども時代への回帰傾向を特徴とするからでもあろう。この点については、次章以降さらに考察を深めたい。

まず次章では「現在（最近）とこれから」のことについての語りあいを紹介し、つづく四章では現時点から振り返った「過去」の出来事についての語りあいを取りあげる。

Ⅲ. 老いの現在

1. 近況を伝えあう

2つの同郷会ともに集合時間は12時となっているが、定刻に全員が揃うことはない。ホテル会の場合は12時になって1人、2人と顔を見せはじめる。1カ月ぶりの再会を喜ぶ最初の時間帯は、互いの近況を確認しあう会話が展開する。欠席者は身近な人に模合金を託す。欠席の連絡がないまま顔を見せないと、何らかの不調を示唆することになる。場面3は、夫を亡くして日の浅いメンバーが遅れて顔を出したときに周囲が気遣う様子である。

〈場面2：近況を伝えあう〉[2012-08-11：ホテル会③]

12時5分前に、いつもの座敷スペースに何人かが続けて顔を見せた。好子さんは腰を下ろしてすぐに、首と腰が痛くて治るまでに10日ほどかかったと切りだした。照子さんは痛いところはないと言い、独り暮らしのチエ子さんはどこも悪くはないけれど一人でいると寂しくて胃が痛くなると伝えた。好子さんは、夫を亡くしてから体重が8キロ減ったと語り、「この11月で3年になる」と付け加えた。

〈場面3：声を掛ける〉[2017-02-20：福女会⑬]

集合時間から1時間近く遅れて信子さんが顔を見せた。足が悪い彼女は、バス停までは遠くて不便だからとタクシーに乗ってきたと話す。短い髪にはパーマがかけられていた。みんながその髪型に気づいて「そのほうがいい」と口々に声を掛けていた。その後、彼女は注文した食事をほぼ残さず食べていた。同級生の幸子さんは信子さんに「ノブちゃん、ノブちゃん」としきりに呼びかけ、気遣う様子が伝わってきた。

ホテル会では家庭菜園で野菜を育てている人が多く、採れたての野菜を持参して他の会員に手渡す場面が時おりみられた。

〈場面4：育てた野菜を配る〉[2014-03-08：ホテル会⑥]

チエ子さんは市場でモヤシのヒゲ取りをする手伝いをしており、そこで仕入れたビニール袋いっぱいモヤシを希望者6人に配っていた。代金はいらないが、もらう人が気を使うからと100円ずつ受けとっていた。照子さんは夫が屋上のプランターで育てたというニラを希望する人に配り、シゲ子さんはハマナー（浜菜）とミツバを分けていた。ハマナーは海のハウレン草と呼ばれるほど栄養があると伝えた。そして末子さんは、庭に並べた鉢で育てたというセロリをサヨさんに手渡していた。キヨ子さんも欲しいというので半分ずつに分けてあげていた。

この場面のシゲ子さんは、模合には入っておらず半年ぶりに顔を見せた。自分が育てた野菜を手渡すことには近況を相手に伝える意味も込められている。また、子ども時代に畑仕事を経験している人がほとんどで、野菜を育てることは当時の手業を思い出す喜びでもあろう。野菜を食べることは体調を整える効果が期待されてもいる。末子さんが別の機会に、家で育てた野菜や果物でつくったジュースを飲んでいるから便秘知らずと言いながらセロリを手渡していた。

2. 郷里とのつながり

同郷会は、現在の郷里にまつわる情報が行き交う場である。なかでも同郷の人（シマンチュ）の弔事はしばしば話題に上る。

〈場面5：シマンチュの弔事〉[2012-01-20：福女会④]

文子さんから、郷友会の会長を務めたことのある人の妹が亡くなったことが伝えられた。この日は友引で地元新聞の告別式広告欄にも出ていなかったために、知らなかったと話す人が多かった。また、会のあるメンバーの義母が100歳過ぎで亡くなり、彼女は模合金を預けてお休みをしたことが伝えられた。

備瀬には墓参りをする日が年に二度ある。一つは沖縄全体で「グソー（あの世）の正月」と呼ばれる旧暦1月16日で、もう一つはマチと名付けられた備瀬独自の日で旧暦8月に日取りをする。両日ともに、中南部に住む出身者の多くも墓参りに訪れる。前者は「ミーサ」とも呼ばれ、自分たちの墓参りをしてから過去一年間に葬式を出した家をまわって焼香するのがならわしとなっている。つぎは、十六日を終えたばかりの福女会において墓参りの話題になっ

た場面である。会話中の「山原（やんばる）」はこの場合、沖縄島北部地域全体の通称ではなく、備瀬のことを指している。福女会、ホテル会の双方でよく聞かれる呼び方である。

〈場面6：墓の場所〉 [2015-03-20：福女会⑩]

幸子さんは備瀬にあった墓を引っ越したことを周囲に話した。夫の一周忌のさいに長男に「子どもの代になったら山原はわからないのだから」と言われ、中城村に造成された見晴らしのよい霊園に墓を移したという。その後いったん他の話題に移っていったが、先の話聞いていた文子さんは、十六日に備瀬に行って墓参りをしミーサで6軒まわったことを伝えてから、自分たち家族の墓のことについて語り出した。

文子：山原にお墓があるということは、もう年間2回ぐらいしか（十六日とマチのこと）行かんさ。だから、ふるさとを忘れたらいけないから、もう、この墓はそこ（備瀬）に造ろうねと言って造ったわけよ。ちょっと子どもたちが不便ではあるけど。

春江：年に1回、2回しか行かないさ、山原には。

文子：またふるさとだから行くべきね、ねえ。これたちの屋敷（夫の生家）もまだあるし。

春江：山原にお墓あるのも、わたしはいいと思うよ。

文子：何回も行くんだったら大変だけど、毎月行くんだったら大変だけど、もう年間2回ぐらいだから、ふるさと思い出してみてもね、墓はそこに造ってもいい。

春江：シマに造ったほうがいいよ。

文子：うちの父ちゃん（夫）は山原、ふるさとを忘れたらいけないから墓はかならず山原に造りなさいよと、もう遺言みたいのがあったわけよ。だからあれが元気なうちに大きく造ったわけさ。自分の家族はもう、ぜんぶここに入れるようにって。みんないちいち造らないで。

郷里を離れて家族を営む彼女たちにとって、先祖を祀りやがて自分も入ることになる墓をどこに定めるのかは、大きな関心事である。子や孫の便宜を考えて現在の家から近いところに墓を移動させたという幸子さんと、子や孫の代になってもふるさとを忘れないようにと亡夫の遺言に従ったという文子さん。備瀬の先祖と、都会に出た自分たち夫婦、そしてこの先の子や孫のこと、それぞれが過去と未来への時間的展望をもとに下した決断といえる。

ムラで最も大きな年中行事である旧暦7月25日のシニグや4年に一度の豊年祭への参加は、ふるさととのつながりを実感する重要な機会である。

〈場面7：シニグ行事への参加〉 [2011-08-20：福女会②]

この日、那覇の郷友会女性部の役員を務める人が福女会の模合に顔を出し、4日後に迫ったシニグ行事に参加する人を募っていた。満81歳になった文子さんが向かいに座る同級生の幸子さんと信子さんに一緒に行こうと声を掛けたが、二人は難色を示した。

信子：〔文子さんのことを指をさして〕あんたが元気よ。

幸子：いちばんうらやましい。

文子：80の声聞いたらやっぱりなんか、カウントダウンになってしまうよね。

幸子：すごく、あんたがうらやましいわけ、踊る人が。踊りたくっても気力がなくて、もうほんと。

信子：着物きるにも大変だから。…シニグの着物きるにも大変じゃない？

文子：あ、そうなの？

信子：チャータッチー（すつと立っていること）はできないのに。

文子：あ、そうねえ。

信子：嘘と思うでしょう？

文子：嘘と思う、わたしは。

幸子：だから、こんなに踊り（好きなのに）。

文子：いろんなことするならわかるよ。なんで、〔シニグ舞の手をしながら〕ゆっくりゆっくり踊りするぐらい。テル子姉さん、できるでしょうよ。

テル子：できないよ。

文子：〔語気強く〕嘘言いなさい。この人なんでもできるよ。

テル子：〔本気を示すため、上着をめくって腰に巻いたコルセットを見せようとする〕

この会話に参加している4人は、70代まではふるさとのシニグを加勢して踊りの輪に加わっていた。このとき衰えをさほど感じていない文子さんにたいし、他の3人はずっと立ち踊りするのがしんどいと訴えた。4日後のシニグでは、4人とも備瀬を訪れ、文子さんだけでなく幸子さんもまた姉の形見の着物をつけて踊った。

3. 老いと喪失

参与観察を重ねていた2014年に、福女会でとくに注目していた古参メンバーは80代の半ばで、ホテル会のメンバーは77歳だった。

〈場面8：老いの速さ〉〔2014-04-20：福女会⑥〕

話題がひと段落したとき、文子さんが、80歳を過ぎてからは日に日に老いを感じるようになったともらし、隣に座る年長の人たちに問いかけた。2歳年上のテル子さんは、自分もやがて85歳になると言ったが、同級生の孝子さんに来年88歳だと訂正された。

文子：やっぱりあれよね、昔のことば言ったとおりに、あーそうなんだねとつくづく思うんだけど、「六十からはニー（年）老ーい、七十からはシチ（月）老ーい、八十からはピー（日）老ーいする（60歳からは年ごとに、70歳からは月ごとに、そして80歳からは日ごとに老いを感じる）」って、つくづく感じるね。〔近くに座る1歳年上の美代さんに向かって〕姉さんどうね？

美代：わたしも感じる。

孝子：感じるよ〔笑う〕。

文子：一日一日がやっぱりいとおしいね、もう80すぎたら。あーそうなんだ、昔のおじいちゃん、おばあちゃんなんかがよく言っていたのに、まさかまさかと思っていたのに、

ついもう。

テル子：(自分も) やがて85になる。

文子：ワッター (自分たち) 85のお祝いしたのに〔笑う〕。85のお祝いはさ、大城シンカ (親族) がまざまざく (大きく) したよ、グランドキャッスル (ホテル名) 借りてよ。

孝子：〔85歳になると言った同級生のテル子さんに向けて〕 来年トーカチ (88歳) ですよ、あんた。

テル子：88な？

孝子：トーカチユーエー (米寿のお祝い) さーや。

文子：自分でも嘘と思ってるんだけど、「うびらじになたさ八十あまて」って琉歌つくったよ。「浮き世荒波に浮き沈みしちよて うびらじになたさ八十あまて (世間の荒波に揉まれて浮き沈みしているうちにいつのまにか八十を過ぎてしまった)」

この語りあいからは、日々老いていく我が身を受けとめきれない戸惑いが語られている。かつて年寄りたちが口にしてきたことばが、年老いたいま、実感として迫ってきている。これまで当たり前前にできたことが失われていくはかなさが語りあいの場に漂っていた。つぎは70代後半を迎えたホテル会のメンバーが自分たちのドジ話を披露しあっている場面である。ここでは、かつての親の姿と我が身が重ねられていた。

〈場面9：リモコンとキュウリ〉 [2014-12-13：ホテル会⑨]

照子さんが、かつて年老いた母親が子どもの名前が出て来ずにきょうだい全員の名前を呼んでいることがよくあったが、今度は自分の番になったともらす。タンスに入れた洋服が翌日になるとどこに入れたかわからなくなっていたり、ティッシュを取りに行ったはずなのに何をしに行ったのか忘れてしまい戻ってきたらまた思い出したり、という体験談が披露された後の掛け合い。

照子：ワン (わたし) 一回、スーパーに行くいうてよ、いつも財布を脇に挟んでいくわけ。

そしたらテレビのリモコン挟んで外に出て〔一同、笑いはじける〕、お家の戸を閉めようとしたらリモコンに気づいて、これ財布でないさ、と気づいて。

キヨ子：うちよ、キュウリよ、キュウリ買うてから。買い物したら、ぜんぶレジで計算するさーね、してから〔店員が自分に指さすしぐさをまねながら〕「あの、キュウリも」と言われて、「え、キュウリ?」って (それで脇に挟んだキュウリに気づいた)。いつやったか覚ええないのよ。

照子：〔笑いながら〕 テーゲー (ほとんど) ボケてる。

キヨ子：キュウリ2本入ってるのよ、(店員が)「あれも計算しますか」って。「えー、これだけよ」と言ったら、ここ (脇のあいだに) にキュウリがあるわけよ。

このあと、それぞれが年老いて「ボケ」てゆく末を案じるといった話題がつづいた。みんな笑いあうなかで和子さんが、「だけど、笑い話じゃないんだよね」ともらした。

これら2つの場面では、老いゆく自分のことを昔の年寄りや親の姿に重ねて案じている。

つぎは、80歳を迎えてからだの衰えを実感するなかで、「ボケる」ことを恐れる気持ちを寄せあう場面である。

〈場面10：物忘れへの対処〉[2017-06-10：ホテル会⑫]

からだの不調についての語りあいが続くなか、照子さんが「でも、みんなボケないでいようね」と、しみじみとした口調でもらす。「うちがいちばん先」とキヨ子さんが笑うと、美津子さんは認知症の検査を受けたら大丈夫だったと言って、キヨ子さんに問いかけた。

美津子：人と約束したのは覚えてる？

キヨ子：約束？これが忘れるわけよ〔みんな笑う〕、これが忘れるわけさ。だから〔小さなノートを手にとって見せながら〕これにみんな書いてある、書いて。トイレにまたカレンダー置いてあるから、今日一日どこに行くんだったかねーっていつて。

美津子：ゴミの日なんか忘れるからさ、これぐらいの紙に、「今日はゴミです」いうて書いてね、足下に置いておくわけ。足下に置いて、朝起きてからよ、これ踏むさ。思い出す。で、またゴミ出す。

和子：みんなそれぞれ。

美津子：ゴミの日、忘れるわけさ。…こうするようになったら忘れない。これ見たら「あ、ゴミだのに」、忘れないように。マジックで予定表みんな書いておって、で、朝起きたらこれ見る。見たら、今日何々あるって。

キヨ子：いちばんトイレがいいよ。トイレで時間くうさーね、あっち置いといてよ、一日のスケジュール見るわけ。

照子：〔笑いながら〕時間くうって、何時間入ってるの？〔みんなで笑いあう〕

ここでは、物忘れがひどくなるなかで、書き留めることでその欠落を埋めようとする工夫を教えあっている。補聴器や杖などの使用、血圧を下げる薬や精神安定剤など服用している薬のことなど、老いの過程を補助するものごとについての情報交換もよくみられる。つぎは、入院期間を経た後の久しぶりの参加をかみしめている場面である。

〈場面11：半年ぶりの復帰〉[2016-06-20：福女会⑭]

体調を崩してしばらく入院していた孝子さん（88歳）が半年ぶりに復帰した。娘2人に付き添われ、杖をつきながらやってきた。2歳年下の文子さんの隣という定位置に座り、久しぶりの会の雰囲気味わっていた。文子さんの同級生の幸子さんも隣に寄ってきて、孝子さんを真ん中にした3人でしみじみと語りあう。孝子さんは、文子さんたちがお見舞いに来てくれたときのことを語り、長い入院生活のなかで気弱になったことを吐露する。

孝子：もう、この人（文子さん）たちが来たから、病院来たから、もう涙がポロポロ、止まらないさね、来てくれたから胸がいっぱいになって。もう弱くなってる、やっぱり。

文子：もう人生が見えてきてるわけ。

幸子：まだまだよ。

文子：だってそう思いたくないけど、思うよね。もう何歳になるということ考えた場合は。

孝子：一回はよ、小さくなって病院にこんなしているよりは、家に帰りたいねえって…、もう弱くなってるね。

文子：歳いっているからもう弱くなってるよ。人生考えたら、自分はどれくらい元気でいられるか、子どもたちに迷惑かけないでいられるかとこれ考えた場合さ。

孝子：初めて思った。

幸子：孝ちゃん姉さんが来たら百人力、来れたから、もうほんと嬉しかった、うん。

孝子：ほんとうに行きたい気持ちあるけど、先月から行きたい気持ちあるけど、まだまだ（出られなかった）。

孝子さんは、福女会でする話は家族でするのはまた違うのだからぜひとも行かせてほしい、と娘たちに頼んで連れてきてもらったと語った。彼女が、この会への復帰をつよく願い、同年代の仲間たちとの語らいをいかに大事にしているかが伝わってきた。孝子さんが不在の間、いまひとつ表情の冴えなかった文子さんもこの日は元気を取り戻していた。

IV. 子どものころの〈故郷〉

1. ムラの内側

本章では、過去への振り返りのなかでも、とくに目立った子ども時代についての想起に焦点をあてる。まず、ムラ内での出来事をめぐる語りあいを紹介したい。昼どきの集いということも作用してか、食についての思い出はよく話題にのぼる。当時なかなか口にするのできなかった「ごちそう」は、ひとり占めせずにきょうだいで分けあったというのが、彼女たち共通の姿勢だった。

〈場面12：ソーコーヤーの豆腐と餅〉〔2014-09-13：ホテル会⑦〕

照子さんが子どものころ、ふだん畑仕事をしている母親が髪を梳かすと、それは法事の家に出かけるという合図だった。そして、法事で出された豆腐（焼き豆腐か揚げ豆腐）を母親がハンカチに包んで持ち帰るのを子どもたちは楽しみにしていた。照子さんの語りに、周りの3人も頷きながら、同様の体験を口にした。

照子：今はいろんなの、食べるものがあるから。母親なんかがソーコーヤー（焼香家、法事を行う家）に行行って帰ってくるの、もうこれが楽しみだった。豆腐切って、ハンカチグワーに包んでくるでしょ、それが楽しみね。

末子：長いタオルに下の方でくびって（結んで）こんなして〔肩に掛けるしぐさをして〕来るよね、おじいたちがね。法事の帰りね、一人前ってもらってきて。

和子：お餅と豆腐と三枚肉とか、それぐらいのもんだけどね。

照子：母親がこうしてハンカチで包んで持って来よった。母親なんか髪長いから櫛であれするでしょ、「おっかあ、どこに行くの」って言うてた。いつもは、ほれ、髪、梳かさな

いさ、農業してるから。髪を梳くからさ、また用事に行くかと思って、「おっかあ、どこ行くの」って〔みんなで笑う〕。

和子：ソーコーヤーに行くって言ったら喜びよった。

末子：だから餅一個。今の子どもって餅食べないのよ。

照子：餅も天ぷらも、食べないよね。

末子：うちの小さいころは餅一個、きょうだい5人分で5等分、6等分。

ケイ子：お箸でこうして〔切り分けるしぐさをしながら〕、こうして、こうして、菊の花みたいに割って。

末子：いちばん後に来る人はしっぽの小さいところ。

親が持ち帰ってきた豆腐や餅に喜んだ自分たちの子ども時代と、餅や天ぷらに関心を示さない今の子どもたち。彼女たちは、この変化に戸惑いを感じながらも、わかちあいの習慣を懐かしそうに語りあっている。つぎは、子守の思い出についての語りあう場面である。きょうだいや親戚の赤ん坊をおんぶして子守をするのは、年長の女の子たちの役目だった。ムラにはかつて、もらい乳という相互行為があったことを伝える終戦後の情景である。

〈場面13：もらい乳〉〔2014-09-13：ホテル会⑦〕

6人きょうだいの長女だったケイ子さんは、後に続く弟妹の子守をしてきた。とくに一番下の子のときは母親が病床にあったため、小学5年生だった彼女がムラ内をもらい乳をして歩いたという。当時、こうした行為はけっして珍しいものではなく、照子さんも、親が山に薪を取りに行っている間にもらい乳をする子がいたと話した。

照子：(子守でおんぶしていると) おむつってないし、つぎつぎシッコかけられて。

ケイ子：つぎつぎ(きょうだい)6人でしょ、だからずーっとやっていた(おんぶしていた)。最後の赤ちゃんは母が(病気で)寝ているときに生まれたもので、もらい乳して歩いたの。あちこちの赤ちゃんできたところ、備瀬の部落内で生まれたできたての赤ちゃんがいるところへ、おっばい余ってた、くださいと言って。

照子：みんな、たいがいこんな、山に親が行ったらおっばいもらいに行きよったさ。

和子：そんなのは、うちはわからんけど。

ケイ子：何にも言わずにね、こっちかわで〔左腕で抱えるしぐさをしながら〕自分の赤ちゃん、して、こっち側で〔右腕で抱えるしぐさをして〕、わたしが連れて行く赤ちゃん(におっばいをあげて)。いま考えるとすごいなと思う、お母さんって。

和子：やっぱりあのへん、考えると田舎っていいね。

照子：あんたが何歳、いくつのときに？

ケイ子：5年生。

このあとケイ子さんは、下の5人のきょうだいのうち第3人と母親を流行り病で立て続けに亡くしたことを語った。照子さんは戦争中に父親と長兄を亡くし、和子さんも父親を亡くしている。こうした背景のなかで、もらい乳という慣習が成り立っていた当時のムラの「あ

たたかき」が3人のあいだで共有されている。

つぎは、ムラ内の広場での思い出を語りあう場面である。マーウイ（馬場）は集落南側にある広場で、ウンネークブは集落北側の広場である。サトウキビの収穫期にはこれら2つの広場にサターグルマ（圧搾機）が設置され、キビの汁を搾って大釜で煮詰めて砂糖をつくるといった一連の作業が行われた。

〈場面14：砂糖と豆の香り〉[2015-04-11：ホテル会⑧]

照子さんの家はマーウイの下にあり、ケイ子さんと和子さんの家はウンネークブの近くにあった。照子さんが、製糖のさいに積み上げられていたサトウキビをこっそり抜き出し、そのまま浜に行つて嚙つたと話すと、他の2人にも身に覚えがあった。また、これらの広場では、豆の収穫をすませた家ごとにむしろ筵を敷き、くるまん棒という道具を使って乾燥した鞘を叩いて豆を出す作業が行われた。このとき、周囲に飛び散ってしまう豆が出た。

照子：自分なんかのお家の上はマーウイいうて、サトウキビなんかこうして（砂糖を）つくりよつたさ。で、積んであるサトウキビ抜いてからよ、浜行って食べよつた〔笑う〕。

和子：あれ、誰も怒らんかったよね。

ケイ子：うちなんかも、やったもん、ウンネークブに。砂糖つくる機械があつて。

和子：つくるときの香りよね、周囲ぜんぶ匂つてきた。

ケイ子：（北は）馬はいないから牛で引いて、ウンネークブは牛だったよ。

照子：（南は）馬だった。で、ここ（マーウイ）でエンドウ豆とかいろんなの、くるまん棒でよ（脱殻した）。みんな自分の家の上だった。

和子：で、しばらくしたらさ。

ケイ子と和子：〔声を弾ませて同時に〕雨降るとき、芽が出てくるわけ。

照子：そうそうそう、これ採りに。

3人：〔声がほとんど重なつて〕あれ、おつゆに入れておいしかったね、香りが。

照子：豆腐マメよ。

ケイ子：豆腐マメと言っても大豆じゃないの、小っちゃいの、これが芽が出てくる。草の中からこれ採つて。

雨のあとに出てきた豆の芽を摘んでおつゆの具にしたというのは当時の共通体験だった。語りあいのなかで3人は、煮詰められていく黒砂糖の甘い香りや、おつゆに入れた豆腐マメの芽の香りを嗅いでいた。マーウイでの思い出について、もうひとつあげたい。

〈場面15：マーウイでの踊りの練習〉[2014-04-20：福女会⑥]

マーウイには、昔からフパルシ（コバテイシ）という名の大きな樹が枝葉を広げ木陰をつくっていた。旧暦6月には男たちがこの木に縄を掛けて綱引き用の太い綱を編んだ。イモが主食のムラにおいて、綱引きの時季には、多くの家庭で収穫まもない粟のご飯を炊いた。語り手たちの実家はいずれもこのマーウイ近くにあった。

トヨ：ガジマルグワー（集落はずれの目印になっているさほど大きくないガジマル）も、

(マーウイの) フパルシも大きくなっていない、あれ3歳児よ。

孝子：あれ、散髪(剪定)してるんじゃない。わたしたち小さいときは下枝にさがりよつたのに、ブランコするぐらいの下枝あったのに。

文子：「エイヤ、サーサー(フパルシの幹に縄を掛けて綱引きの綱を編むときの掛け声)」の音が聞こえたら、「今日もヲイミ(折目、仏壇にごちそうを供える日)があつて、美味しいのが食べれるね」と思ってたさ。

孝子：アワメー(粟飯)食べられると言って〔笑う〕。

トヨ：そして、スミ姉さんが婦人会長してるときに(マーウイで)チヂン(太鼓)を打ちしながら。あんた見なかった？

文子：覚えていない。

トヨ：運動会の練習をしていた。中心になって大きな太鼓ボンボン打ちながら、婦人はぜんぶその周りにいっぱい、遊戯。そのときの歌があるよ。

文子：歌ってごらん。

トヨ：誰かが少しでも言ったらわかるけど。

トヨさんは、「ならや、くぬぎの」と歌い出し、向かいの孝子さんの助けを借りながら、少しずつ思い出しては歌い継いでいった。「榎や櫟の葉は黄に染まり 広い田んぼに麦まきすます やつとすんだと見上げる空に 明日も天気だ夕日が赤い」。

トヨ：あ、二番は「親は返して子はくれ(塊)打って」〔と歌い出し、他の人たちも声を合わせる〕。これは、ジローヤー(屋号)のスミ姉さん、太鼓ボンボン打って。(集落の)北、南の婦人ぜんぶ集まって。それが見たいために、わたしは豚に餌をやる時間だったけど急いであげて飛んでいった。とっても面白かった。

何度かくりかえし歌っているうちに歌詞が終わりまでつながった。トヨさんの「はい、もう一回」との呼びかけで、周囲のみんなで合唱になった。「親は返して子はくれ打って 広い田んぼに北風荒れる 風に吹かれてなま土踏んで 今日朝から精出す親子」。歌い終わると、みんな笑顔での拍手喝采となった。

後日調べてみたところ、この歌には「麦まき」という題が付けられており、昭和7年の尋常小学3年生向けの唱歌ということがわかった。合唱した歌詞には、一番と二番が入れ替わった箇所があったものの、すべての節が不足なく思い出されていた。

2. ムラの外に出る

尋常小学校に入った子どもたちは、1、2年生のときには集落内の分校に通ったが、3年生になると隣ムラにあった本校まで1里の道を裸足で通った。毎日の通学は、ムラの外に出て、ふたたびムラに帰ってくることの繰り返しだった。つぎは、帰り道に名護原という集落を臨む高台まで来ると、決まったように急にお腹が空いたという共通体験である。

〈場面16：名護原から望むムラ〉[2014-07-20：福女会⑧]

文子さんが、学校からシマまでの1里の道のりをみんなで肩を組んで歌いながら帰ってきたと言って、「あのころに戻りたいね」と、周囲の人たちに投げかけた。彼女は、学校からの帰り道、集落を見下ろせる名護原まで辿り着くと、「名護原のぼってアガシマ（自分たちのムラ）見れば、ヤーサノーイ（ひもじくなる）」という文句が口をついて出たと教えてくれた。「この年齢ならみんな知ってるよ。学校から帰りながら自然に口から出ることばだのに。名護原に来たら、もう自分の家はすぐそこだから」と文子さんが言うと、隣に座るキヨさんも、「（名護原から見た）部落は、伊江島と向き合ってるけれどもだいぶ下がっているわけよ。学校はずーっと奥の方にあるから、あっちから来てこの辺来たら、〔力を込めて〕ほんとに、ひもじくなるよ」と笑った。名護原に立つと、正面の視界に入るのは海の向こうの伊江島で、備瀬の集落は見下ろすかたちになる。

孝子さんは、「この名護原がいま、名護原らしくないね、（昔のように）高くない。もう平坦フージー（平坦になって）で、ギンネム（繁殖力が旺盛な豆科の植物）いっぱい、昔の名護原じゃないよ。昔の名護原は石ばかりだった。土地改良（1980年代に実施された土地改良事業）したからすべてが変わってる」と言うと、信子さんが「そう、今は何も無いよ」と応えた。

この語りあいのなかでは、名護原に辿り着いて集落を見下ろしたときに急に感じたひもじさが反芻されている。家に帰ればイモか何か食べ物にありつける。帰ってきたという安心感と一体となった空腹感だった。自分たちがムラに包まれていることはこの例のようにムラの外に出てはじめて意識される。同様に、沖縄の島内に抱かれていることもふだんは気づかず、離れるときになってはじめて実感される。

〈場面17：泊港での見送り〉 [2014-09-13：ホテル会⑦]

1953（昭和28）年、中学校を卒業して1年ほどたったころ、照子さんはムラからの集団就職の一員として那覇の泊港から大阪に渡ることになった。同郷の人が営むメッキ工場で働くためだった。末子さん、ケイ子さん、和子さんの3人は照子さんたち同級生を見送る側で、大阪に向かう人たちをうらやましく思いながら眺めていたという。以下に登場するサヨさんも集団就職組の一人だった。

末子：泊港でテープ引っ張って、見送り。

ケイ子：ワンワン泣いてね。

末子：サヨが「アンマー（おかあさーん）」と言って。テープ引っ張って、船が出て行ったらサヨが「アンマー」って。

照子：ほんとこのテープっていいね、汽笛が鳴って、テープをボンボン投げて、ハッサヨナー（感嘆詞）。

末子：あの時代が懐かしい。…あのとときの（サヨの）「アンマー」というの、身に沁みた。…船に乗って行くの、とつてもうらやましいねえと思ってたけど、テープ、船がだんだん出ていって「アンマー」というの聞いて。

和子：寂しかったね。

ケイ子：もう船に乗ってしまったら歩いて下りられないから〔笑う〕。

港を離れ行く船の上で同級生が「アンマー」と叫ぶ声が、ふたたび彼女たちの耳に響いている。そしてこの叫び声は、見送る側が抱いていたうらやましいという感情を一変させるだけの切実さがあった。この場でもふたたび、家族や島と離れる切なさが反芻されていた。

3. 戦場になったムラ

会では戦争体験もまたよく話題に上る。ムラが戦場となったのは、福女会の年長メンバーが10代半ばで、ホテル会の人たちは小学2年にあがったところだった。

〈場面18：ムラが焼かれる〉〔2018-03-09：ホテル会⑭〕

1945年4月に米軍がムラに侵攻してきたときケイ子さんたち家族は、備瀬崎の離れ小島のアダン林の中に隠れていた。ここは、ウガンヌメーと呼ばれるムラの聖域でもあった。照子さんの家族は主集落からの離れた高良原の壕に、そして松枝さんたちは隣ムラである新里の壕に身を寄せていた。ケイ子さんはウガンヌメーから、ムラの南端からつぎつぎと茅葺き屋根が焼かれる様子を見ていた。

ケイ子：備瀬のカヤヤー（茅屋根の家）、焼かれるのを見た。メンバーリ（集落の南側）から、瓶か何か知らないけどを投げたらパァーって燃えて、あたしなんかウガンヌメーの中に、アダン葉の中に隠れて備瀬ぜんぶ見ていた。

照子：ウガンヌメーに？

ケイ子：うん、…なんか瓶みたいなの。

松枝：燃えやすかったはず。

ケイ子：アメリカ（米軍）が南のほうからどんどん来て、一つ一つ。

照子：自分なんかはもう、ワッター（自分たちは）そのときは高良原にいた。マラリアにかかってよ、黄色グワー（キニーネのこと）、飲めずに捨てて…

松枝：新里の自然の壕があつてよ、そこにいた。もう（米軍が）「出てこい、出てこい」して、母が弟のお産したさ。そのときまで特攻隊が、体当たりして。

照子：伊江島でしょ。…防空壕から伊江島は見えよったわけよ、防空壕から。かわいそうだった、日本のマーク付けてよ〔飛行機が突っ込む様子を手振り表現する〕、…ワッター兄さんは伊江島は飛行場があったから、だからよけいひどいところに行ってるわけよ。

このあと、激戦地となった伊江島で亡くなった照子さんの兄についての想起が続いた。松枝さんが、中学生のときに照子さんの母親が波打ち際で伊江島を見て泣いていた姿が脳裏に焼き付いていると語ると、照子さんも「毎日泣いてたさ」と静かにことばを添えた。

ムラが米軍の支配下に入ると、日中は米兵たちがムラ内に入り出すようになった。彼らは若い女を見つけると連れ去っていくと聞かされていた。

〈場面19：天井に隠れる〉[2014-04-20：福女会⑥]

当時17歳だった孝子さんは、米軍の命令で避難先の山を下りて集落に戻ると、日中に巡回する米兵に見つからないようにと天井に身を隠した。当時の状況を私に説明しながら進行した場面である。

文子：あの当時はアメリカの軍隊が来て女をとるわけ。だから、女の人は男みたいな髪を切って、男の格好をして山道を通っていたんですよ。

トヨ：服装は最低の物を着けないとやられるという気持ちがあったわけ。

孝子：ワッター（自分たちは）何ヵ月、天井に隠れていたかわからん。アラカチャー（実家の屋号）の天井は桁が大きかったから。

文子：若い者は天井に隠れるわけ。お年寄りはお下のほうで留守番してるんですよ、そしてアメリカ（米兵）が入ってくるでしょ。

孝子：「チャンロー、チャンロー（来たぞ、来たぞ）」。

文子：「来たよ」と言ったら「動くなよ」ということ。そしたら物音立てずにじっとしてるんですよ、動かないで。

孝子：この人（文子さん）は小さいからごまかせた。

文子：わたしは小さかったから、外に出ても。

孝子：みんなより小さかったから、4、5年生に見えたんでしょうね。あれは連れられなかったけど、ワッター（うちの妹の）ミヨは同じ年だけど、やがて引っ張られたんだよ。

文子：ミヨちゃんと一緒に畑でイモ掘っていたわけよ、そこに米兵が来たわけさ。

トヨ：〔嘆息を漏らす〕

文子：ミヨちゃんはわたしより背が高いからお姉さんに見えたんでしょうね。そして（米兵が）引っ張ろうとしたわけよ。弟は、もしネーネー（姉さん）がアメリカ人が引っ張ろうとしたら泣きなさいよと言いつけられていたわけ。そしたらミヨちゃんが引っ張られようとしたわけ。そこで、わたしが（弟に）泣きなさいと言っても、泣くわけがないさ。そして、やっと逃れたって。

孝子：「アンマーよー（おかあさん）」と叫んだって。

文子：大きな声で「アンマー」と叫んだわけよ。そしたら、別の上官らしい兵隊が来たから離れたって。

孝子：ワッターはアメリカ人というの見たことない、天井にチャー上りだから（ずっと上っていたから）。

この語りあいは、孝子さんが天井の桁に上ってじっと息を潜めていたときの緊張感を伝える。「チャンロー、チャンロー」という家人からの呼びかけと、妹が発した「アンマーよー」という叫びが語りあいの場にも響いていた。つぎは、壕に潜んでいた和子さん家族が米軍に包囲されたときのことが語られている。

〈場面20：壕に手榴弾を投げ込まれる〉[2012-08-11：ホテル会③]

戦時中の米軍上陸後、小学2年生の和子さんは祖父母とともにメンピラと呼ばれる段丘地の壕に籠もっていた。祖父は日露戦争の経験から、弾は高いところに落ちるから山手には行かず近くにいたほうがよいと判断した。そして、山手に避難していた親戚が合流するというので壕を広げるための石打ち作業をしていて、米兵に気づかれてしまう。

和子：ソテツ畑の中だけど、親戚が山から避難してこっちに来るといったから、その日、もっと広くなそうって、石打ちカッチャンカッチャンしていて気づかれた。そしたらさチエ子：それで投げられたわけ、結局？

和子：すぐは投げんよ。もうカチャカチャ、下も壕あるから、みんな一つかねと思ったんじゃない。

末子：出てこいとは言わなかったの？

和子：ううん、出てこいも何も言わん。(靴音が)パカパカしたから。

末子：靴音が？

和子：カマンヤー(屋号)おじいがや、「チューヌ壕ヌ上アッチャカスル(誰かが壕の上歩いている)」と大きく怒鳴ったわけよ。そしたら急にもう、靴の音がいっぱい来たわけ。で、うちのおじいがさ、これちょっとおかしい、みんなちょっとまず静かにしてと言って、ちょっとソテツの中から見たら、えっ、周囲アメリカ(米兵)囲ってるから。だから、「死ぬよ」って言って、一回も着けてない新品のものぺ着けてさ、着け終らんうちに(手榴弾を)投げ込まれたわけさ。

末子：出てこいとも言わんね？

和子：言わん。あの息苦しさ、真っ黒い煙の中だ。それがもう。

チエ子：よう生き残ったな。

和子：考えたら、おばあがよ、もうどうしても我慢できなかつたって。もう外行って、この際だから、どうせどうなるかわからん。…そしたら、おばあだけ出ていったわけよ。で、うちはもう、おつかあは慶良間(に出稼ぎしていた)さ。おばあっ子だから、もうおばあがいないと何時間も真っ黒い煙で泣いたら、翌日からもう喉が。

末子：おばあは出て行って、あんただけ残ったわけ？

和子：いや家族(と残っていた)。

松枝：吸い込んだはずね。

和子：いまだに気管支の中みんなね、黒いなんか、やけどの跡があるよ。

和子さんはこのあと翌々日から先の記憶がしばらく途切れたと添えた。つぎは、かろうじて生き残った彼女が終戦後の家庭内での様子を振り返った場面である。

〈場面21：おじいの温もり〉[2014-09-13：ホテル会⑦]

壕に投げ込まれた手榴弾の煙を大量に吸い込んだ和子さんは、しばらく声が出ず、痩せ細って目だけが大きな子どもだった。戦死した父親の代わりに母親は家から離れて働いて

いたため、祖父母に育てられた。

和子：じいちゃん、ばあちゃんがいて生きただよね、うちなんか。…おつかあは、住み込みでしか終戦後働きに行かんから。…で、うち、おじい、おばあがいたから。いつもオヤジ（夫）に言うけど、うちのおじいみたいに優しく、いい人は世の中いないはずって〔笑う〕、いつもオヤジ（夫）に。〔語気つよく〕とにかく、かわいがりよったわけ。冬なったら足冷たいからって、あっためてさ。

ケイ子：ね、おじい、おばあは。

和子：言いながら温めてくれるし、うちオヤジ（戦死した父）に一回もそれされたことないからね。

照子：あらん、あんたは戦争であれしてる（怪我をしている）から、かわいいでもあるし、かわいそうでもあってるわけさ。

和子：それもあったかもしれんけど。

照子とケイ子：〔同時に〕声は出ないしさ。

和子：いっさい、カシマタしないさ（うるさがらないさ）、いつも。

照子：声は出ないし、やせてはいるし、この子をどうして生かすかねって。

末子：おじいのは、孫は、カシマタしないよ、大事にするよ。

和子：もう、とにかく大事にされた。

ケイ子：ほんと骨と皮ばかりだったもんね、小学校（のとき）。

祖父にかわいがられたことを繰り返す和子さんとその語りを受けとめる3人とのあいだには、冷たい足を包んでくれる祖父の温もりが感じられている。

V. 語りあいの場で実現していること

1. 老いの過程を支えあう

毎月の集いでは、まずは互いの近況を伝えあい、体調を気にかけてあう。会場まで足を運ぶということ自体に、みんなに自分の無事を伝える意味が込められている。バスを乗り継いだり、家族に車で送ってもらったり、あるいはタクシーを利用したりして、会場までたどり着く（場面2, 3）。月に一度の集いに参加することはすでに長年の習慣となっていて、その日が来るのを待ちわびながら過ごし、会が終わればまた来月にみんなと会えることを張り合いにしてひと月を過ごす。育てた野菜を届けるのは、相手を思いやる行為でもあり、自らの近況を伝えることでもある。（場面4）。

老いは喪失の過程でもある。からだが思うように動かず以前できたことができなくなり、物覚えも鈍るようになる。場面7において、このとき81歳の文子さんはからだの衰えをさほど自覚しておらず、シニグ行事の踊りなら難なくできることを同級生の2人にうらやましが

られている。しかし場面8で、数えの85歳を迎えた彼女は、昔の年寄りたちがよく口にしてきたことば、「六十からは年老い、七十からは月老い、八十からは日老い」を実感しているともらす。80代半ばになって老いの速さに戸惑い、年長の人たちに同意を求めている。場面11の孝子さんは、福女会での語りあいは家族相手のものとはまた違うのだからと娘たちに車で送ってもらい、杖をつきながら現れた。数カ月の入院生活を経て久しぶりに会に参加し、心身共に弱っているのを初めて痛感したと同年代の仲間に打ち明けている。

高齢社会の進展によって認知症が増加しているときかんに喧伝される世の中で、彼女たちもまた「頭」の衰えを案ずる気持ちが強い。ホテル会の場面9と10では、物忘れがひどくなったことを語りあい、このまま「ボケ」てしまうかもしれないという不安を寄せあう。80歳を迎え、同年代で認知症になった人が周囲にも目立つようになったこともあって、より切実に物忘れへの具体的な対処法を教えあっている。こうして、老いの不安をひとり抱え込むのではなく、互いの状況を受けとめあうことでその心理的負担を軽くする。

老いるとは、自分のからだの力が失われていくだけでなく、身近な人が弱り衰える過程に立ち会い、そして先立たれるという喪失を経験することでもある。夫の介護と看取りを経てしばらく会合を休んでいた人も、やがて仲間に促されてふたたび顔を出すようになる。場面3で、夫を亡くして日の浅い信子さんをしきりに気遣う幸子さんは、自身もまた夫を亡くした寂しさを抱える日々を送ってきた。喪失に直面した人は、似たような体験を経た仲間たちとの交流をとおして次第に気持ちの整理をつけていく。そして、近しい人を失うという体験は、いずれ訪れる自らの最期と、自分が去った後の家族のことを想う態度を導く。同郷人の弔事を身近に受けとめ（場面5）、自分や子孫が入ることになるであろう墓の場所に思いをめぐらす（場面6）。

それぞれの老いの体験について語りあうことは、老いへの対応の仕方を互いに学びあう機会ともなる。福女会の場合、会員の年齢に15年ほどの開きがあるため、年長者が示す老いへの対応は後続の者にとってモデルの提示になっている。老いによる心身の衰えをまださほど感じていない人でも、先輩たちの様子を見聞きすることは、近い将来に自分に生じる変化を予感させる。集いの場は、互いの状況を伝えあうことで自身の体験を相対化しつつ、老いへの構えを育むという予期的社会化の場となっている。

そして、2つの集いの場において印象的なのは、語りあいのなかでしばしば笑いの渦ができることである。ムードメーカー的存在の語りを中心に、笑いがつぎつぎと起こる。場面9と10のように、老いや喪失といった深刻になりがちな話題のなかにも笑い声が響きあう。独りのときなら反芻して落ち込んでしまうような事柄も、みんなで笑い話にする。こうした笑いの効用については、「いやなことがあっても独りで抱え込まずにみんなと笑いあっているうち、いやな思いも散ってなくなる」という福女会のある会員のことに集約されているだろう。笑いによる場への没入は、日常の不安や緊張からの一時的な解放をもたらし、反芻により固着していた視点の転換をもたらす。

2. 〈故郷〉への回帰

前章でその一端を紹介したように、同郷・同年代の老年期女性が集う場であるために、昔のふるさとを懐かしむような語りあい豊かに展開する。子どものころによくやった遊び（場面1）や労働¹²そしてムラの行事など、ひとつの想起が呼び水になってつぎつぎと語り重ねられていく。そして、語りあいのなかでは、家庭や広場などムラ内のなじみの場所が舞台となり、その場所と彼女たちが一体となった営みが描かれる。これらの場面には、懐深くに抱かれるような温もりと安心感が漂う。

こうした包まれている感覚や内側にいるという感覚は、子ども時代を振り返れば、何より家庭の中で満たされていたことに気づかされる。場面12では、法事に出かけた親や祖父母が、出された豆腐や餅を食べずに子や孫のために持ち帰り、家にいる子どもたちもまたそれを楽しみに待っていた、という情景が語られている。この種の話はしばしばとりあげられ、ホテル会のあるメンバーは、子どものときにはどうして大人は食べないのだろうか、お腹が空かないのかなと思っていましたが、親になって子どもを思う親の気持ちに気づかされたと言った。彼女たちはまた、親たちが持って帰ってきたごちそうは、かならずきょうだい全員で分けあって食べたと言えぬ。一人が食べられる量はわずかになったが、みんなで一緒に食べたという記憶が深く刻まれていた。こうしたわかちあいの姿勢は、個々の家庭においてだけではなく、ムラの人たちのあいだでも共通していたことが、場面13のもらい乳の慣習から伝わる。今は失われたこの相互行為は、互いの身がいかにか近づいたのかを示すとともに、当時と今とでは身体感覚がいかにか変化したのかを物語っている。

彼女たちは、家族や親戚そして近隣の大人たちに庇護されていただけでなく、ムラやその内側のなじみの場所（コモンズ）に抱かれてもいた¹³。場面14や15で語られるマーウイやウンネークブでの情景は、ある時季に人と場所とが一体となって展開した営みを描いている。そして彼女たちはムラの外に出てはじめて、自分たちがムラの懐深く抱かれていたことに気づかされる。場面15は、毎日学校からの帰り道に名護原という高台に立って集落を望んだとき、急にひもじさを感じたという語りあいである。この空腹感は、もうすぐムラに着き家に帰れるというほっとした気持ちと表裏一体となった身体感覚であった。場面17では、島を離れるさいの「アンマー」という叫び声の想起とともに、見送る側も感じた身を切るような切なさがよみがえっている。

突然やってきた戦争は彼女たちとなじみの場所との一体感を引き裂いた。自分たちを包み守ってくれた家が焼かれ、見知らぬ「アメリカ」たちに占領されたムラは、その表情を一変させた（場面18）。米兵に見つからないようにと天井に隠れ息を潜めていたときの緊張感と米兵に連れて行かれそうになったときの緊迫感がなぞられる（場面19）。また、防空壕を包囲された挙げ句に手榴弾を投げ込まれその煙で喉をやられてしまったという小学2年当時の体験が、今も少しかすれが残る声で語られる（場面20）。戦争が去った後、声も出ずに骨

と皮だけになったこの少女は、祖父の懐に抱かれながら少しずつ心身を回復していったことが反芻されている（場面21）。

そして、子どものころの〈故郷〉をめぐる語りあいは、当時と現在とが対比され、昔にあった良きことが今は失われてしまったという喪失の嘆きへと展開することが少なくない。例えば場面11では、かつて喜び分けあった餅や天ぷらというごちそうに、今の子どもたちは興味を示さないという戸惑いが重ねられる。一方、今の人たちはなぜ自分一人でごちそうを食べられるのかが不思議でならないと、わかちあいの姿勢が失われたことが嘆かれる。また場面16では、名護原というなじみの場所がかつてとはすっかり姿を変えてしまったことへの違和感を寄せあっている。ムラ共用の広場であるマーウイはいま、ムラの観光地化が進行するなかでアスファルトに覆われ観光客用の駐車場になった。ホテル会のあるメンバーが、「今の備瀬を歩いても昔の面影はぜんぜん浮かばない。目をつぶってはじめてかつての面影が浮かんでくる」と語ったのも、同じような喪失感ゆえのことだろう¹⁴。

このように、語りあいのなかで温もりとともに描かれる〈故郷〉は、現在の郷里ではなく、今は失われた子どものころの情景である。しかもその情景は、長年の反芻を経て純化されてもいるだろう。彼女たちは、子ども時代の思い出を語りあうことをとおして、かつて自分たちを包んでくれていた〈故郷〉をその場によみがえらせている。こうした姿勢は、老いの過程を歩んでいることと深く結びついているにちがいない。年とともに行動範囲がしだいに狭まりゆくなかで彼女たちは、身近な世界をより濃密に感受するようになっていく。その道程で、月に一度、自らの芯が形成された〈故郷〉への思慕を寄せあい、語りあうことのできる同郷の仲間がいることの有り難さをかみしめている。

【注】

- 1 語りを引用するさいの表記については以下のとおり。タイトル脇の〔 〕は聞きとりを行った年月日、()内は著者による内容の補足、〔 〕内は著者による語り場面の補足。語りの中の…は、中略。また、語り手については一部仮名にしてある。
- 2 関西地区備瀬同志会については、つぎを参照のこと。石井宏典 [2000] 『『同志会』という共同の物語：沖縄のある集落出身者たちの並ぶ場所』やまだようこ（編）『人生を物語る』ミネルヴァ書房、113-142頁。
- 3 石井宏典 [2008] 「ならいとずらしの連環：那覇新天地市場の形成と展開」サトウタツヤ・南博文（編）『社会と場所の経験』東京大学出版会、45-76頁。
- 4 加茂陽 [1995] 「都市移住者の適応と不適応」松本通晴・丸木恵祐（編）『都市移住の社会学』世界思想社、137-164頁。
- 5 石井宏典 [1993] 「職業的社会的化過程における『故郷』の機能：生活史法による沖縄本島一集落出身者の事例研究」『社会心理学研究』8(1)、9-20頁。
- 6 石井宏典 [2000] 前掲論文。
- 7 Sluzkiは、移住直後の家族において、道具的役割と表出的役割の分担が図られることを指摘している。おもに男性が担う「現在－未来」志向の道具的活動は現在の環境との結びつきを強め、お

- もに女性が担う「現在－過去」志向の表出的活動は移住前の環境とのつながりを保つ。Sluzki, C. E.[1979]Migration and Family Conflict. *Family Process*, 18(4), pp. 379-390.
- 8 E. レルフ [1999: 原著1976] 『場所の現象学』高野岳彦・阿部隆・石山美也子（訳）筑摩書房, 99-101頁。
 - 9 Rowles, G. D.[1980]Growing old “inside”: Aging and attachment to place in an Appalachian community. In Datan and Lohmann(eds) *Transitions of aging*. Academic press, pp. 153-170.
 - 10 本人からの私信による。
 - 11 福女会およびホテル会のメンバーによるシニグ参加については、つぎを参照のこと。石井宏典 [2016]「都市とムラを結ぶ踊りの輪：沖縄一集落の伝統行事シニグを支える人たち」『茨城大学人文学部紀要：人文コミュニケーション学科論集』20, 1-32頁。
 - 12 子どもたちが担っていた労働については、つぎを参照のこと。石井宏典 [2017]「自然との交わりの記憶：裸足と芋の世代が継承するムラの祭祀」『茨城大学人文学部紀要：人文コミュニケーション学科論集』22, 1-32頁
 - 13 コモンズについては、I. イリイチ [1999] 『生きる思想』（桜井直文監訳）藤原書店、を参照のこと。
 - 14 石井宏典 [2016] 前掲論文, 29頁。

本研究は、JPSP科研費（21530652, 25380841, 16K04255）の助成によって支えられた。